

23回 FINA DIVING GRAND PRIX (Bolzano. 5—7 July 2017)

「審判をして」

国際審判員 安永三郎

今年は昨年を引き続き 2 回目の大会となった。昨年はリオ五輪の前哨戦ということで参加国も多かったが、今年は 14 カ国の参加となった。(この後スイスが追加) 選手数、選手のレベルもいくらかおとなしく感じた。参加国の少なさからか審判員の数も少なく、地元イタリアの審判員も入れて 9 名の審判団であった。3 日間のイベントで 1 回の休憩で後、全部審判として入った。

FINA からは、Frans van de konijnenburg 氏、大会ディレクター Klaus Dibiasi 氏、レフリー Valerio Polazzo 氏、Marco Zampieri 氏であった。

ジャッジミーティングでは、とにかく人数が少ないので無理をいうががんばってほしいということと、暑さによる対策もしっかりとってほしい。という注意事項もあった。

ジャッジについては、逆立ちの静止 (安定) をしっかり確認し必ず 0 ‘~2 の減点を入れること。細かなジャッジが少し高かったり、低かったりするとトータルした場合に大きな差が出るので 0’ 単位であってもあわせるという目を持っていなければならない。

その点では、大会を通してイベントが終了後直ちにジャッジが Frans 氏のところに集まり傾向を聞いていた。1 日目には採点にばらつきがあったが 2 日、3 日となると採点もあってきた。ジャッジの実技習得のための勉強には最適な大会であると思う。

今回改めて、細心の注意を払ってジャッジしないといけないと思った。減点するところはする、しないところはしない。選手のレベルのせい、いい演技がなかなかでない、でも 8 点、8、5 点とまり、自分としてはもう少し上を押さえないほうがよいのかなと感じた。

Frans 氏に質問した。「201c のタックポジションについて。」「ひざ下をタッチするものと、しっかりとタックをとるときの違い。」私はタッチするときはそれなりに減点していたが減点はしないとのことであった。C をとったあと、それがオーバーになるかの調整 (コントロール) なのでそれを減点してはいけない、でも最低タッチしていないと減点するべきであるとのことであった。

シンクロダイビングでイタリアチームが 0 点を出した際に、「フェイルダイブ」のコールはレフリーはしなかった。後で質問してみたら国際大会ルール? ではレフリーはしないとのこと、するとすれば通告でやるとのことであった。ミックスシンクロでは男女場所が違ってよいらしい。

試合結果から見ると、榎本選手は逆立ち種目の立ちなおしを申告すれば認められたはずである。他の男子選手も認められていたからである。後できてみると初めて立ちなおしをしたそうである。風のためであったので、今後の課題であろう。勉強になったはずである。馬淵選手が「君が代」を齎した。予選よりセミファイナル、セミファイナルよりファイナル種目的に劣っている彼女には失敗が許されない状況でよく完璧に決めきってくれました。二年連続の君が代は感動しました。今回の大会後、人間的にひととき大きくなったような気がする選手たち。これからも頑張れ。関係各位に対し衷心より感謝申し上げ報告とします。